

# 支援事業活動・成果報告書

平成 27 年 8 月 6 日 作成

1 事業の概要				
(1) 団体名	ストップ結核パートナーシップ日本			
(2) 事業名称	インドネシア伝統的影絵 ワヤンによる結核のための啓発活動			
(3) 事業種類	直接事業 / 団体基盤強化事業 / 直接事業・団体基盤強化事業			
(4) JICS 支援額	650,060	円	事業全体の費用	円
(5) 実施期間	2014 年 1 月 9 日 ~ 2014 年 4 月 30 日			
(6) 実施対象国	インドネシア			
(7) 活動地域	ソロ			
(8) 活動概要	<p>◆事業を実施するに至った ①背景 ②現状・課題 ③目的</p> <p>① 結核は、インドネシアでもっとも深刻な病気の一つで、世界保健機関（WHO）2010 年の報告によると罹患率 10 万人あたり 189、推定結核患者数 450,000 人と世界でも 4 番目に患者数の多い高負担国の一つである。インドネシア国家結核対策（National Tuberculosis Programme : NTP）のもと、国全体を通じ結核が減少するよう取り組んでいる。ストップ結核パートナーシップ日本のパートナー団体である（公財）結核予防会の支部がインドネシアにあり、予防、治療などに関して支援を行っていた経緯があった。そのような中、インドネシアの伝統的影絵「ワヤン」を活用したコミュニティに根ざした啓発活動を計画。外務省 N G O 補助金に申請し、現地視察調査を 2012 年 1 月に実施した。その結果をもとに 2013 年 11 月に現地へ出張、実施に向け具体的な調整、シナリオづくりのワークショップを含む、制作に入った。JICS（日本国際交流プログラム）の助成をうけ、2014 年 2 月 23 日、公演実施に至る。</p> <p>② 近年は経済の発達は著しいが、地方と都市の経済格差は大きく、経済的弱者にとっては、医療機関受診は後回しとなり、そのことが症状の悪化、周囲への感染へつながる。また、地域に人々は、「結核は遺伝」「結核は呪い」「結核は自然治癒する」などと信じている人も多く、正しい結核の知識の普及が課題となっている。また、保健所などによって行われる結核対策キャンペーン等は、地域コミュニティの人々にとっては、聞きなれない医療・保健用語も含まれ理解が難しいこともわかった。誰にでも理解しやすく、身近に、自分事としてとらえるような啓発活動が望まれている。</p> <p>③ ワヤンは、15 世紀ごろから広く地域に根差した伝統芸能で、メディアが発達していない頃の情報手段や教育手段としても活用されていた。また現代においてもワヤンは、ソロ地域などでは上演されること多く、また現代的にアレンジを加えたものも発達し、彼らにとってエンターテイメント性があり、伝えづらいメッセージをわかりやすく伝えるツールとして適していると予想された。そのようなワヤンを活用し、彼らの文化に根差した、わかりやすく楽しい結核の正しい知識の普及を目的とする。</p>			
◆活動の目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・結核の啓発活動を見た地域の人々の病気に対する意識の向上</li> <li>・結核の啓発活動に参加した人々の結核患者に対する差別・偏見の減少</li> <li>・保健ボランティアと地域の人々（感染の可能性のある人や患者の家族）とのつながりができ、早期診断や治療サポートに繋がること。</li> </ul>			

## 2 活動内容・事業の実施成果

### (1) 活動状況・実施内容

日時：2014年2月23日（日）9：00-12：

場所：ソロ（スラカルタ）市内 スリ・ウダリ（会場）

観衆：およそ500名

内容：ダラン スリ・ワルヨ氏を中心とし、ワヤングループ「Wayang Suket」による上演。藁ワヤンと称している。（故グンドノ氏が藁をもちいてワヤンを演じていたスタイルから由来する）ワヤン・クリ（影絵）、ワヤン・ゴレッ（人形劇）、ワヤン・オラン（演劇）の3種類が混合された作品。音楽も伝統的ガムランなどに加えてバイオリンやギター等が加わりアレンジされていた。演出は冗談を交えた楽しい内容であった。保健所からは、結核対策を行っている医師と看護師が演劇に参加し、コアメッセージを伝えたり、観客とQ&Aを実施したりした。

コアメッセージ：

①（病気が）完治できる、②薬は無料である、③結核の治療は、周囲への感染を減らす

### (2) 実施成果・達成状況

ソロ市中心部在住の人々におおむね結核に関する正しい知識を周知することができ、「よく受け入れられている」と評価された。「楽しめたし、伝えられたメッセージは観客にたやすく効果的に受け入れられた。パンフや本を読むほど退屈しない。すごいと思ったのは、医者とワヤン訳がブレンドされていて距離が感じられず、違和感なくマッチしていたこと。この上演のおかげで一般の人が医者に情報を求めやすくなる気がした」「医者の説明（上演中の演出）がわかりやすかった、楽しめた、観客はストーリーに集中して楽しんでいた」「続けてほしい」など好意的な感想が多かった。しかし、上演時間の長さ、演出部分など、わかりづらい部分があったのでナレーションで補足すべきなど、改善点も多く挙げられた。

メディア：

Solo pos, Jawa pos, Swara merdeka（ローカル新聞）

現地TV（TATV Solo、ISI TV）

その他：

世界保健機構（WHO）が主催する第2回東南アジア、西太平洋、中東・地中海ナショナル STB フォーラム（\*）（2014年3月3-4日、ジャカルタ）の中で、活動状況が報告され、ストップ TB パートナーシップインドネシア、日本の協働により事業が実現、成功したことが報告された。

（\*）11カ国のアジアのを中心としたストップ TB パートナーシップが集まる会議  
2014年テーマ：「私たちの結核の成功の拡大と継続」

## 3 教訓・課題

### (1) 活動を通じて得られたもの

ワヤンは、インドネシアの人々のエンターテイメントの選択肢として必ずしも上位ではないが、観客数、観客の様子、メディアの紹介のされ方などからその注目度、エンターテイメントとしての質の高さが伺えた。また、企画、制作、実施の過程におけるインドネシア関係確保、地元専門家などとの関係性の構築、協働体制も大きな成果の1つと考えられる。そして、上演後の評価会などのコミュニケーションの場は互いに学びを深めるよい機会であった。

### (2) 今後の課題・目標設定

今後の展開については、結核対策をおこなっている現地団体などと連携し、保健ボランティアの現状の活動に加えることの検討や、集団感染がほこりやすい工場などや学校などでの実施が考えられる。インドネシアは、多様な文化が存在するので、その地域の文化をとり入れた、オリジナリティある独自のスタイルをつくることも想定できる。また、エンターテイメント・エデュケーション等の学術的評価方法を参考にし、結核の啓発普及の手法の一つとして活用、応用して行くことが推奨される。

## 4 エピソード・写真集

会場「スリ・ウダリ」の入口



イベントのチラシ&ポスター

会場の様子



観客の様子



演奏の様子



観客の様子



PPTI ソロ、ソロ市保健局のみなさんと

